



## うちの子はかわいい、そして、子育てはつらい！



東京都医学総合研究所の健康プロジェクト 研究員

**森本裕子** (もりもと ゆうこ)

2011年、博士号取得 (京都大学)。総合研究大学院大学特別研究員を経て2016年より現職。

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 流動研究員

**中嶋智史** (なかしま さとし)

2012年、博士号取得 (京都大学)。NTTコミュニケーション科学基礎研究所リサーチアソシエイトを経て2016年より現職。

### いまだ賭けの途中

私達にとって、子どもを持つか、また、持つなら「いつ」持つかは、大きな賭けでした。キャリアの早いうちに子どもを持ち、子育てによる制約があっても、なんとか安定した職を得て研究が続けられる方に賭けるか？ 安定して研究を続けられる環境をまず確保し、子どもを持つのに良いタイミングが巡ってくるまで生殖能力と体力が保つ方に賭けるか？

私達は、前者に賭けることになりました。実家は遠く、サポートは期待できません。夫婦で同居してはいましたが、その分、通勤時間は、夫が往復2時間、妻は4時間です。条件は悪かったのですが、夫婦ともに、子どもを持つことを周囲から暖かく支援してもらえられた状況でした。今しかないのではと、飛び込んでみることにしたのです。そうして生まれた息子は、2歳を迎えました。夜泣きのない子だったら……、大人しい子だったら……、病気に強い子だったら……。事前の期待は裏切られ続けています。子育てによる制約は、考えていたよりもずっと大きいものでした。土日は、仕事を片づけるための時間ではなく、息子に振り回されるための時間になりました。息子を寝かしつけた後に仕事をしようと思っても、2時間粘られた後では親の方がぐったりです。それでも、不思議なほど、「こんなはずではなかったのに」とは思わないで、なんとなく納得してしまっている自分達に気づきます。なにより、息子はかわい

い。言動が可笑しくて、寝顔が変で、食い意地が張っていて、それはもう大変にかわいい。一組の夫婦としては、子どもを持って良かったと心から思っています。

しかしながら、ふと我に返って、私達は今後も研究を続けることができるのだろうか？と考えると、急激に不安になります。子育てや家事は最低限ですませているのに、研究時間は減る一方です。夫は睡眠時間を削って仕事をこなし、整骨院で「過労死って知ってます？」とたしなめられました。妻は、研究合宿に行くときも、学会に参加するときも、学会運営スタッフとして働くときも、子連れで起きます (すべてのケースで暖かく迎えていただき、心理学関係者の方々へのポジティブ感情が高まりました)。たしかに、なんとかかしようと思えば、「なんとか」はなるのです。だけど、現在の職場は、夫婦ともに、任期付。いつか終わりが来てしまう。業績をあげたい。研究にもっと時間を使いたい。だけど、できない。そもそも、夫婦二人でやっていかなければならない以上、どちらかが、あるいは両方が倒れたら、すべてがダメになってしまうのです。だから、本当は、無理をしてなんとかつじつまを合わせている今のやり方は、下策です。でも、そしたら、現状維持すら、ギリギリじゃないか？ ここから挽回することなんか、できるのか？ 次の職場が見つかったとして、それが夫婦同居できる場所にあるとは、実家に近

いところにあるとは、限らない。何かを諦めないで、もうどうしようもないのでは——日々、ふつふつと湧き上がる焦燥感に襲われます。

はたして私たちは、賭けに勝てるのでしょうか。賭けに勝てば、華々しいステージで、研究と子育ての両立について語る機会がくるかもしれません。負ければ、発言の機会は、おそらく二度と、こないのです。

### ある冬の朝

息子は家族で一番の早起きだ。私が目覚めると、もうベッドの上でごよごよに言っている。時間を確認。6時過ぎ。私はもう一度眠ろうとする。「……とーたん？」。気づかれた！ 息子がずしんと私の上に乗ってくる。重い。寝たふりをしてしていると、息子は私の布団を一枚ずつはがしていく。寒い。それでも寝たふりを続けると、息子は私の枕元をガサガサ探し始める。まずい。息子は私の眼鏡を探し当て、カチャカチャと眼鏡のつるを開こうとする。壊されては大変だ！ 私はとっさに眼鏡を受け取り、手に握ったまま、また寝ようとする。「とーたん！ ○×▽□……うわああああ (号泣)」。こうなると私の負けだ。「おはよう……」。私が起きると、息子は満面の笑みで抱きついてくる。私は妻が寝ているのを横目に見つつ (息子は妻のことは決して起こそうとしない)、息子を抱いてリビングに移動する。こうして私達の一日は始まるのである。